「チーム石巻」2021 活動報告

立命館大学人間科学研究科教授 増田梨花

2021 年 10 月 1 日（金）から 10 月 3 日（日）まで、「視て、聴いて、感じて、考えて、行動する」をモットーに、現地のコーディネーター、阿部浩氏、木村正氏の案内で、「チーム石巻 2021」の大学院生 5 名のメンバー、応用人間科学研究科時代の修了生 2 名（内田一樹さん：埼玉県在住や平井一成さん：静岡県在住）そして、私の友人でピアノ講師の村田真弓さん（東京都在住）も加わり、総勢 11 名で活動を行った。

今回の主な活動としては、宮城県石巻市の高齢者が多く住んでいる公営住宅の集会場前のウッドデッキで「大学院生の出し物：さんぽ」、「絵本と音楽のコラボレーションライブイベント」「ヴァイオリン演奏」を行い、また石巻市、女川町等 様々な場所でフィールドワークを行った。

＊上記の詳細な報告は以下の大学院生、修了生、ボランティアの報告を参照

You Raise Me Up

数年前からこの石巻市・女川町等の復興地支援の活動を行っているとき、「You Raise Me Up」（作曲：Rolf Løvland 作詞：Brendan Graham）の曲が私の身体中をめぐり、「円」を描き続ける。朝の散歩で朝焼けを見たとき、イベント参加者の笑顔を見たとき、フィールドワーク中の真剣な院生たちの表情を見たとき、その院生たちを温かく見つめる先輩（修了生）やボランティアさんの眼差しを見たとき、そして私たちの全てを受け止めてくださる、現地のコーディネーターさんたちの懐の広さや深さを感じたとき・・・様々な「とき」に私は以下の歌詞を心の中で口ずさんでいる。

When I am down and oh my soul, so weary
When troubles come and my heart burdened be

Then I am still and wait here in the silence
Until you come and sit a while with me

You raise me up so I can stand on mountains
You raise me up to walk on stormy seas

I am strong when I am on your shoulders
You raise me up to more than I can be.

貴方がたが私たちを高めてくれる　だから高い山にも立てる
貴方がたが私たちを高めてくれる　だから嵐の海も歩ける

私たちは強くなれる　貴方がたの肩に身を預け
貴方がたが私たちを高めてくれる　今以上の自分たちになれる

（梨花先生訳）

恐らく、今回この「チーム石巻　2021」のプロジェクトメンバーも、きっとこの私の感覚を体験し、心から共感してくれるに違いないと思う。

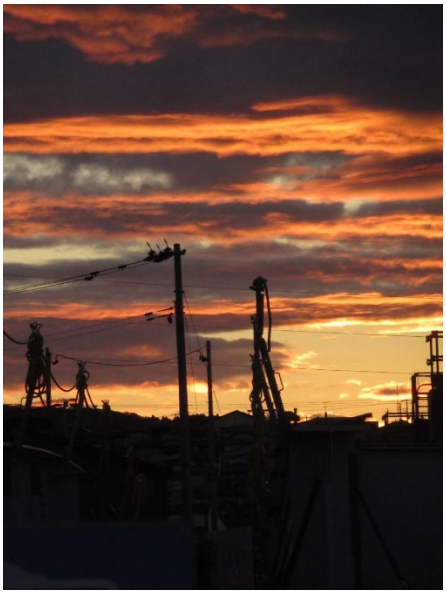

写真１　朝の散歩：石巻の素晴らしい朝焼け

写真２　朝の散歩：静かな「とき」を奏でるギター

朝の散歩

石巻に行くと、夜明け前から起きだして、散歩をしたくなる。（院生達にとってはいい迷惑かもしれないが・・・）石巻の朝の澄み切った空気、海からの心地よい風、草花のかおり、、、そんな石巻の静かな朝から「いのちの耀き」をそこここに発見することができる。

石巻の「夜明け前」の散歩は、視て聴いて感じて考えて行動することを１番体感できる静かな朝のときである。太陽がだんだんと顔を出し登ってくると、地上にエネルギーが満ち、活力がわき、心が満たされていく。そして、顔を出した太陽に、「新しい朝をありがとう！今日も一日よろしく！」と、言いたくなるのだ。この石巻の「はじまりの朝」は私にとって、とびっきり大切なときなのである。

以下、「チーム石巻 2021」メンバーそれぞれの活動を通した感想を記す。

「チーム石巻での活動を通して」

立命館大学大学院人間科学研究科心理学領域 M1 重田玲央

石巻に来るのは，これで通算４度目ほどである。前回が高校３年の夏だったので，実に５年ぶりに町を見たことになる。町並みはとても変わっていて，かなり町の再建が進んでいるのが分かった。しかし，人々の心の復興はそれに追いついていないようである。イベントでお会いした方は，県外から来た私たちとの交流を喜んでおられるようだった。このところ，コロナの影響でコミュニケーションがとりづらかったため，なおのこと嬉しかったようだ。しかし，それは一時のことで，すぐにまたコミュニケーションの少ない新たな日常に戻ることになる。彼らのそばにいてあげられないことは，わたしにとってはとても惜しいことで，それは彼らがつらいときに頼れる相手が少なくなることを表すからである。持つべきものは友達だとは思うが，高齢の方ともなると電子機器をうまく扱えなかったりするわけで，そうなると友達はいるのに孤独な状態になってしまうわけである。

また，石巻南浜津波復興祈念公園ができていたのだが，「がんばろう！石巻」の看板があることで知られるこの場所は，もとは住宅地である。ここに国の指定の公園ができるって，元の住人の方にとってどうなんだろうかと，ほかの方と黄昏ながら話していた。祈りの場が水場であることも気になるし，植樹して育成中だからかあまりにモノが少ないのも気になった。「かつて多くが失われたこの場所で，インスタ用の写真を撮るためにそんなことするんですか…(困惑)」みたいな(海外では似たようなことがあったと聞いた)，そんなことにならないように私たちを含めたいろんな方で，東日本大震災を伝えていく必要があると感じた。

そのほか，「女川は流されたのではない。新しい女川に生まれ変わるんだ」で知られる女川町，多くの児童や教員が犠牲になった大川小学校，震災当時に避難場所となった日和山，情報館などに行き，人々の声や当時の実際の様子，遺構となった建物を見た。物事の捉えよう次第で人は前向きにもなれるが，それでも大きな災害でなにかを失った人たちは絶望の淵に立っている。進めたとしても，あの日の記憶はついてくるし，それに付随する感情も他者の目も言葉も，一緒になってやってくる。それに触れて感じられる感覚は，言葉で簡単に言い表せるものではないのだろう。それを当事者でない自分が，質問などで掘り下げていくことに抵抗を感じたし，下手に震災に関連した発言をすることで傷つけたくないと

思った。でも，触れてほしくはなくても，心の片隅に助けてほしい気持ちはあって，それを色々な事情から出せないでいるのかもしれない。災害現場における心理職の存在価値は，きっとそこにあるのだろうと思った。もちろん，災害がおこったときだけではなく，その後のケアにおいてもだ。

わたしが東日本家族応援プロジェクトで石巻を選んだのは，過去に石巻を訪れたからでもあるし，心理学を学び始めてから復興支援のあり方に興味を抱いたからであった。そして，過去に石巻を訪れたことは，心理職を志したきっかけとして今の自分につながっている。だから，フィールドワークで目に焼き付けた景色，そこでわいた感情，考えたこと，受け取った言葉，そのすべてを伝えていきたいし，学びを深める糧にしたい。

チーム石巻でかかわったすべての皆様に，心からお礼申し上げます。素晴らしい学習の場，機会をつくっていただき，本当にありがとうございました。

「10 年目の石巻市を見て、11 年目向けて」

立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助領域修了生　　内田一樹

今年は 3.11 から 10 年の年であった。コロナ禍という新しい災害のもと、今までと同じ生活ができなくなり、増田先生たち立命館大学院の復興支援プロジェクトに参加することも 2 年ぶりとなった。今年の 3 月に立命館大学院人間科学研究科東日本大震災復興支援プロジェクト 10 周年シンポジウムに参加した際に、福島の方が次のようにおっしゃっておられたことが心に残っている。「10 年と何か節目のように言うけれど、私たちには 11 年目も 12 年目もある。」

「見る」、という点では毎年出会っていた人に「見える」、毎年訪れていた場所を「見る」、の２つの「見る」があった。

人と「見える」という点では、現地のコーディネーターの阿部氏、木村氏とも久しぶりの再会となり、お話をすることができた。また集会所でのイベントで訪れた場所は 2 年前と同じであった。毎年同じ場所を訪れたり同じ人たちと出会ったりすることで、変化を感じることができる。しかし、今年気づいたのは、これは相手からも同じである、ということであった。相手からも変化に気づいてもらえたり、色々と声をかけてもらったりする。一方で、コーディネーターの阿部氏と集会所のおばあちゃんの会話が心に残った。阿部氏が「10 段階中どれぐらい復興が進んだと思う？」との問いに、おばあちゃんは「5 か 6 だね」と答えられた。モノだけではない復興の途上にあることの難しさを感じた。また、復興街づくり情報交流館の館長であるリチャード氏に震災の記憶/記録を伝承してい

くことについてお聞きすることができ、それも自分自身の中では心に残っている。石巻市の方々は温かく私たちを受け入れてくださり、時に冗談も交えながら笑顔でお話をしてくださる。またこの人たちと会いたいと思った。

場所を「見る」という点では、変化をしたところよりも、不思議と変化していないところに目が行くようになった。どんどん変化していく街の様子や建物に、以前に訪れた時の気持ちや仲間の院生との会話が思い出され、その当時聴いたお話が蘇る。初めて訪れた時の圧倒された感情や思いと、震災以前の様子として展示されている写真やパネル、映像での光景も重なった。

すでに何度か訪れたことのある大川小学校は綺麗に整備され、震災遺構として残った。真新しい震災伝承館には、あの日何があったのかを伝えるパネルがあり、資料などをパソコンで見ることができる。一方で、震災遺構として建物としての小学校は残るけれど、補強や囲いなどはなく雨ざらしの中、風化にまかせるままになっているそうだ。いずれ風化して建物がなくなった時ここに震災遺構として残るものは何だろうかと考えるとともに、遺族の方々の思いも様々ある中での震災遺構のあり方をめぐる行政と市民についても考える。最後に門脇小学校の隣にある伝承交流施設 MEET 門脇を訪れた。ここは公益社団法人 3.11 みらいサポートが運営しておられるそうで、様々な展示品や来場者が参加できる仕組み、あの日に起こった出来事について最新の機器等を駆使して追体験ができるようになっていた。門脇地区が体験したことの「伝承」向けた取り組みが、年を経るにつれて様々な形、様々な方法で増えているように感じた。

聞く―聴く―ことは、コミュニケーションの第一歩だと思う。しかし、この一年コロナ禍においてはそのために踏み出す足である、話しかけることを奪ってきた。今回プロジェクトに参加して、久しぶりにおずおずとでも足を踏み出すことができた。そして石巻市の方々は以前と変わらず、たくさんお話をしてくださった。

現地の人たちとの出会いだけではなく、大学院生の方々との出会いもまた新鮮な学びにつながったように思う。現地の方に質問をされたり、考えたりしている様子は自分自身の学びへの刺激にもつながった。また移動中などに私自身に対する院生さんたちからの質問を通して、改めて自分自身の考えや思いを言葉にすることができた。増田先生をはじめとする一緒に行く参加者の方々がいるからこそ、毎年深く感じること、学ぶことができるのだと思っている。

「本当の意味での復興とは」

立命館大学大学院人間科学研究科対人援助学領域 M1　小笹大道

2021.10.02

「女川は俺の育った街だ。でも、俺の知っている女川は一つもない。すべてなくなった」。今回の活動で同行いただいた木村正さんの言葉であった。女川町に訪れたとき、以前に訪れたときよりも街は元気を取り戻していた。少なくとも私にはそう見えた。街はきれいになり、おしゃれな shop が並び、家族連れで賑わっていた。街がそうやって変わることを「復興」と呼ぶのだろうが、木村さんの思い出に残るあの場所・この場所はもうここにない。その復興の形が悪いわけではなく、そういう気持ちを持っている人がいることを忘れてはいけないことを教わった。でも、その後に続けられた言葉がある。「この店をやっている人達は俺の仲間ばっかりだ」と。その言葉はすごく誇らしげに感じられた。そして私はこう思う。「最後は、人とのつながりだなぁ」。

午前中に訪問した集会所で、「復興は 10 のうち、どれぐらい進んだ？」って聞かれたら「6 ぐらい」と答えられた。「確かにものはきれいになったけれど、心がね」と続けられる。ようやくみんなが新しい生活に慣れ、新しいコミュニティができかけてきた時に、コロナがあり、人と会えない寂しさ・辛さがあるという。そういう意味では、今回訪問したことで、皆さんが出会える場をつくるきっかけとなっているなら、それはとても嬉しいことであった。

一人ひとりに思いがあり、歴史があり、ふるさと（原点）がある。そのことを大切にし、知ることだけでも、人は安心し元気になれる。だからこそ、思いを馳せることの大切さを改めて感じた時間であった。

2021.10.03

この日は大川小学校を訪問。何回訪れても、心が痛む場所である。今回訪問して「花がなくなったのはなぜだろう」って最初に感じた。以前は、慰霊の碑に花があり、まわりにも花が植えられていて、遺族やボランティアの方が世話をしていたと聞く。震災遺構として行政が管理することとなったためなのか、それとも違う意味合いがあるのか。また機会があるときに聞いてみたい。そして、今回はじめて裏山に登らせていただいた。それほど広いスペースがあるわけではないが、確かに逃げる場所があった。では、あのとき、同じ状況でその判断が自分にはできただろうか。今でこそ、このことを教訓にして、判断できるかもしれない。しかし、あのときに…。いろんな無念があったであろう。以前、語り部の方から、「本当は当時のことを話すのは辛い。話しているといろいろなことを思い出しちゃうから。でもこれからの人に同じ思いをしてほしくない。だから語り部をやってるんだ」。ここには防災としての教訓がたくさんの人の思いと一緒に残されていた。

MEET 門脇での映像もまた胸が締め付けられた。幼稚園の子どもをなくしたお母さんの言葉。「帰ってきた時に、下半身や手の先がなくて。でも帰ってきてくれてよかった」と言われていた。この言葉を発するに至るまでに、いろんな感情があっただろうと推察できる。それを思うとまた胸が締め付けられる思いがした。

写真 3:再生した女川町のショップ前　　写真 4： 大川小学校の風景あれこれ

現地の方々は、何もなかったように振舞われる。でも多くの人がいろいろな思いを背負って生きておられる。私たちにできることは、いったい何だろう。現地に足を運ぶ、思いを馳せる、寄り添う。そしてこれから起こるであろうと言われている南海トラフ地震をはじめ、様々な災害時の教訓にすること。そのためにも、これからも現地の方々の思いをしっかりと伝えていきたい。

「チーム石巻に参加して」

ピアノ講師　村田真弓

私は増田梨花先生の友人として 2013 年から毎年参加させていただき、院生の皆さんが読む絵本に合わせてその情景にふさわしい曲を演奏したり効果音を出したりするサポートをしています。

今回はコロナの影響により２年ぶりの石巻になってしまった。
毎年通っていた施設が受け入れ不可で行けなかったりと残念ではあったが石巻でコーディネートをしてくれているかたの御尽力の甲斐有り　初めて訪問する

公営住宅の集会所で発表する事ができました。

いつも感じる事ではあるが院生の皆さんは当日までに研究や打ち合わせを重ねて積極的に聞いてくれているかたの輪の中に入っていき気持ちをほぐしていく工夫をしている事が見ていてわかる。特に今回のチームはストレートマスターの院生と社会人の院生が仲良くチームワークを発揮している姿がたくさん見られた。またフィールドワークにおいても現地の人の話を積極的に聞いて理解を深めていたように思う。
このような情報を大学に戻って伝える事も大切になるであろうから今回の活動を充分に生かして欲しいとも思う。

個人的には活動の回を重ねたからこそ見えてくる事も有り、きれいに整備されていく街並みや施設に対し少し複雑な思いも持ってしまった。たくさんの人達に伝承していくには新しい施設を作り伝えていかなければいけないのだろう。けれど観光地のようになってしまうのはどうなのか？変化していく様をどのように暮らしている人達は受けとめていくのか？
目に見える事へのサポートも必要だろうけど　「チーム石巻」が継続してきた心へのサポートを今後も続けていく事が　前向きに生きていく事やちからになるきっかけの１つになれば…と思う。

最後に「チーム石巻」をまとめて有意義な活動にしてくれた増田梨花先生に感謝です。

「石巻での活動から学んだこと」

立命館大学大学院人間科学研究科対人援助学領域　M2　藤田幸世

私は、石巻チームに入り、東日本大震災の復興プロジェクトに参加させていただいた。今回の実習で同行してくださった石巻ライオンズクラブの阿部さん、おしかの学校長の木村さんから多くのことを学ばせていただいた。また、修了生の内田さん、平井さん、ピアノ伴奏をしてくださった真弓さんなど、素敵な方々との出会いがあり、その方々からも、続けていくことの大切さや刺激を受けた３日間だった。
私は看護師としての教育を長く受けてきたことから、震災直後の瞬間的な能動的な「いのち」救うという支援の教育を主に受けてきた。今回の実習で、「ここ

ろ」を考えた支援や長期的な復興支援については、ほとんど理解していなかったことに気づかされた。

2021.10.2

この日は、復興支援住宅へ音楽に合わせた「絵本の読み聞かせ」という形で実習させていただいた。阿部さんが集まって下さった高齢者の方々に「復興はどれだけ進んだか？」という質問に対し、「５か６割程度やな・・・。心がな・・・。」と言っておられた言葉が印象的だった。建物や道路などのインフラインはかなり復興した印象を受けたが、人間の「こころ」や個人の思いや課題というものは、そう簡単に復興するものではないということを実感した。

現在はコロナという新たな課題があり、静かに時間の経過を過ごしている高齢者にとっては、新たなストレスを生んでいると思われるが、私たちの活動を「久しぶりに外出して楽しめたよ」「こうやって気にかけてくれてるということが嬉しいよ」と言ってくださり、とても喜んでくださった。音楽を伴奏した絵本の読み聞かせという方法は、私にとっても初めてのことだった。音楽とコラボした絵本の読み聞かせは、色鮮やかに情景が思い浮かべることができ、絵本の魅力を改めて感じることができた。

その後、女川町へ。警察の派出所がひっくり返っており、遺構として残されていた。道の駅というところには、女川や石巻のうまいもののほか、銀行や駅もあり、イタリアっぽいおしゃれな街が作られていた。女川は「還暦以降の人間は口出しするな！」という文言があり、高齢者から若者に政治のバトンタッチをされたとのことで、町の『復興」が他の町より迅速だったという話を聞いた。しかし、この町は木村さんの故郷であるようだが、「女川は俺の故郷だが、俺の知っている女川ではない！」と言われていた言葉が胸を突き刺さった。復興と同時に、以前の町の雰囲気はすっかり消失してしまったようで、復興と犠牲になったものが多くあり、寂しさのような複雑なものを感じた。

次に、石巻津波復興記念公園に見学に行く。海側の土地は、ほぼ住宅街が消失しており、広い公園が広がっていた。ここに多数の住宅街が広がっていたことを聞いたが、石巻市が買い取り、元住民は山側に土地を求め、転居して行ったとのことだった。津波がここまで来たということを示す印があったが、それを見た瞬間、「人間の力ではどうしようもないな」と感じ、怖くなった。公園内を散歩すると「がんばろう石巻」という看板が目立っていた。この土地で、津波にもまれ、必死に高台に避難しようとした住民や、黒く大きな津波が襲ってきたことを考えながら歩いた。

2021.10.3

翌日、日和山神社の参拝する。この神社は高台にあり、多くの住人が必至で逃げ着いた場所であった。必死で階段を駆け上がり、たどり着いた神社から見下ろす津波に襲われた町を見つめる心境は、どんな思いだっただろうかと想像すると寒気がした。

次に、女川小学校遺構地を訪れた。この場所は現在裁判を終えたところだが、74人の子供と10人の教職員が犠牲になった場所である。現在も1人の教職員は休職中で口を閉ざしている状況であるとのこと。この学校の避難マニュアルが問われている。「この職員も無念であったに違いなく、また職員の遺族も複雑な心境である」と阿部さんは言われていた。グランドの隅にしいたけ栽培のための山があり、ここに逃げ込んでいれば助かったであろうと言われていたのが、悲しくてたまらなかった。校舎の前に慰霊碑が置かれていたが、「日常が一変した日」と書かれていた。遺族にとっては、あの日から一変してしまった日常・人生である。私も親になった今としては、この場所はどうしても感情移入してしまう。学校の中のことは、学校の教職員に任せるしかないのだ。教職員を責めているのではない。ただ、対人援助職に携わる私たちとしては、その責任感や危機感を併せ持ちながら仕事をする必要があると感じた。

石巻市の人たちは、あたたかく私たちを迎えて下さった。悲しみや痛みを持ちながらも前向きに生きておられると感じた。「このつらい体験を次に生かそう」とする強いメッセージを感じた。今回の実習で改めて、復興とはどういうことなのか、回復するというのはどういうことなのか、改めて自問自答している。復興住宅の高齢者の方がいっておられた「気にかけてくれるのがうれしい」という言葉は、長期的に「被災地に意識を向け続ける」ことの大切さを教えてくれているのではないか。この町が受けたつらい思いや頑張っている姿を風化させてはいけないと思う。それらを周りに伝えていくことが私の使命だと思う。

京都に戻り、次の日からまたいつもの日常に帰ることができた。疲れは少し残っていたが、いつもの日常に帰ることができる、「幸せ」を感じながら仕事をすることができた。そして、災害が起こった時に、患者さんをどう救うべきか、避難経路について問題点などを考えるようになった。町も意識も風化していくことが多いこの世の中で、被災地に意識を持ち続ける・心を寄せる・復興の証人になる、課題や頑張っている姿を第 3 者に伝えていく、震災から学んだことを今後につなげることができるように、つなげていくことの必要性を今回の実習で学ぶことができた。きっと以前の私より、広い視点で見れる看護師に近づいたのではないかと感謝している。

最後に、今回の実習で同行してくださった阿部さん、木村さんには本当に感謝している。震災を後世に残す記念館や公園は確かにあるが、やはり、語り継ぐ人がいなければ風化してしまう。阿部さん・木村さんの熱い思いがあったからこそ、深い学びにつながることができた。継続的に自腹で現地に出向く内田さん、真弓さん、平井さん。長期的に関わり続けるという大切さを学んだ。そして、深い実習の機会と素敵な出会いを作って下さった増田先生にも感謝している。

「東日本家族応援プロジェクト in 石巻」に参加して

立命館大学大学院人間科学研究科対人援助学領域 M2　伊野充代

私が東日本家族応援プロジェクトに参加したのは、個人ではなくチームとして復興支援が今までどのように行われ、10 回目にどんなことができるのかをこの目で見て体感したかったからだ。旅行で訪ねることも復興の少しでもお手伝いになると信じて、岩手県、宮城県、福島県を数年間にわたって訪ねた。震災遺構では、語り部の方々から、生々しい話を聞く機会もあった。その中で、大川小学校の姿が頭から離れなかった。その時の感覚を再確認し、想いを回収したかった。そして、「絵本と音楽とのコラボレーション」を実感したいと思い、石巻を選んだ。今年度の目標は、「視て、聴いて、感じて、考えて、行動する」であった。「絵本と音楽のコラボレーション」のイベントと、フィールドワークを通して得た貴重な体験を伝えたいと思う。

10 月 2 日（土）

まず、石巻市営湊町集会所でのイベントがあった。初めて参加するため、不安で押しつぶされそうになったが、いざ始まってみると、そんな危惧は吹き飛んだ。職場では、幼児とその保護者に絵本の読み聞かせを行っているが、絵本に音楽が加わると、こんなに表現に幅が出ると感動した。イベント終了後に、90 歳を過ぎた方々と話すことができた。普段しゃべる機会がほとんどないらしい。「若い人が来てくれると、とにかく嬉しい。今日は誘ってくれたから、来れた。とても楽しかった」と言ってくださった。「頼らないようにと日々心掛けているので、素直にありがとうと頼ればいいとわかってるけど、申し訳なくて遠慮してしまう。でも、今日は頼るね。来年また会えるのを楽しみに、1 年頑張る。頑張る甲斐ができた、また来てね」と名残惜しそうに、部屋に戻っていった。ほんの 3 時間くらいの時間なのに、こんなにも根付いている。これが、続ける意味だと実感

できた。元気に再会できるのを今から楽しみにしている。他の方々とも、もっともっとおしゃべりしたかった。

写真 5:大学院生の出し物「さんぽ」リハーサル

写真 6:イベント風景①

写真 7:イベント風景②

10 月 3 日（日）　　石巻市震災遺構大川小学校、大川震災伝承館
（2021 年 7 月 18 日より一般公開）
震災伝承交流施設 MEET 門脇（2021 年 3 月開館）

私は、2 年振りに大川小学校に降り立った。当時は、まだ規制ロープが張り巡らされていたので、近くに寄れなかった。駐車場が整備され、伝承館ができていた。以前の想いはどのように回収できるのだろうか。

「市の教育委員会は一般的なマニュアルは作成していると回答しているが、大川小学校に避難マニュアルがなかった可能性が高い。津波は来ないから大丈夫という何故かわからないが、そんな雰囲気が住民にもあった。地震の時に、裏山に逃げるという選択肢がなかったようだ。しかし、裏山には、小さいながらも登る道があった。そして、そこはしいたけ栽培で日頃から児童達にはなじみがあった。その道を、数 10 メートル登ると、コンクリートで整備されたちょっとした

広場があった。ここまで来ていれば、助かった可能性が高い。何故運動場に留まらせたのかわからないが、児童はそれを守った」

上記の話を、現地コーディネーターの方から伺った。ふっと納得できた気がして、前回訪ねた時からの複雑な想いは回収されたかもしれない。しかし、過去は変えられない。ありきたりで終わらせたくないので、幼児を持つ親子が利用する職場での防災、安全だと思われがちな大阪の自分の地域における防災の教訓として、深く考えて伝えていきたい。

次に訪れたＭＥＥＴ門脇で、地域の住民の方々は、小学生が避難しているのを見て、町の人達も避難したという話があった。津波が押し寄せる中で避難する映像が流れたところで、身体が反応した。頭痛、吐き気、腹痛に見舞われた。今も文章を作成するだけで、その感覚が蘇る。受け止めた想いのアウトプットが必要だ。

写真 8:　大川震災伝承館と大川小学校裏

写真 9:　2021 年 3 月に開園した
石巻南浜津波復興祈念公園
新しく掛け替えられた看板の前で

最後に、現地コーディネーターの阿部さん、木村さんに深く感謝を申し上げます。ご自身の被災に関わることや、復興に関わることまで、何を質問させて頂いても、真摯に向き合って話してくださいました。本当にありがとうございました。そして、温かい居心地のいいチーム石巻を作ってくださった増田先生、チームの皆さまありがとうございました。また、会いたいです！！

「被災地で感じること」

立命館大学大学院人間科学研究科心理学領域　M1 田中 優希菜

東日本大震災は、当時大阪から出たことのなかった小学生の私にとって、正直に言うと同じ日本とは思えないほど遠い話でした。大阪でも揺れを感じ校庭に避難をしましたが、その揺れがこんなにも大きな被害を起こしているということが信じられないまま、ぼんやりとテレビを見ていたのを覚えています。それから、南海トラフ地震で大阪にも大きな被害が出るかもしれないと聞いても、震災についてしっかり調べることもないまま過ごしてきました。

現地で見たもの、感じたこと

写真 10 石巻南浜津波復興祈念公園 標識

写真 11 石巻南浜津波復興祈念公園 一丁目の丘

ここには私たちと変わらない日常があったのだと思います。

心理学や対人援助職について学ぶ中で、自分にも何かできることはないかと思い、石巻でのプロジェクトに参加させていただきました。何も知らないまま行くのは失礼だと、授業内の事前学習に加えて、NHK の震災特番を見つけられた限りすべて目を通し、現地に向かいました。現地で自分の足で歩き、実際に人の話を聞くと、テレビ番組はやはり意図的にまとめられたもので、良くも悪くも焦点化したものなのだなと感じます。映像が撮影された場所に立っても、映像で定められた視点で見る景色と、現地で五感を使って頭に描く景色では、まったく様相が異なります。テレビ番組でしか知れないこともあり、現地でしか知れないことがありました。それでもなお、これだけ大きな災害があったことが信じられないという気持ちと、確かにそこに存在していたものがぽっかりと変わっているんだなという印象が頭に残っています。

大きな物語と小さな物語

１日目は、集会所で絵本を使ったイベントを行いました。集まってくださった皆さんは本当に楽しく参加していただき嬉しい限りです。イベント前後で地域の方とお話させていただき、最近の生活から小学校の頃の話まで、いろいろなお話を伺いました。明るく元気にお話いただいたのですが、予想もしないところですぐに「震災」が顔を出します。衝撃的な記憶と、生活のあらゆる部分が変わってしまった事実は、どんな記憶からもすぐに繋がってしまうのだと思います。これまで社会が発信する大きな物語にしか触れてきませんでしたが、個人の中の小さな物語に、計り知れないほど大きな影響のあった出来事なのだということを目の当たりにしたように感じました。東日本大震災と一口に言っても、経験したことも、見聞きしたことも、感じたことも、考えることも、人それぞれなのだなと痛感します。インターネットや書籍で調べて出てくるもの、メディアが描くもの、行政が記述すること、個人が語ることは、それぞれ個性があって、それぞれ視点も表現も違います。持っている想いも情報量も違うので、自分の言葉も意図した通りに相手の頭には浮かばないだろうし、現地の人が見ている景色をそのまま見ることもできません。たった１回関わっただけでは、見えないものがたくさんあると思います。少しでも知っていけるよう、何度もいろいろな方面から関わり続けていきたいと思いました。

フィールドワーク

写真 12 東日本大震災遺構 旧女川交番

写真 13 東日本大震災遺構 大川小学校

イベント以外の時間は、現地の方にご案内いただきながらフィールドワークを行いました。震災遺構として残されている女川町の交番や、震災の記憶を語り継ぐために作られた石巻南浜津波復興祈念公園、多くの人が犠牲になった大

川小学校などを訪れながら、そこに確かに自分が過ごしてきた場所と変わらない日常があったのだと、考えられる限り想いを巡らせていました。特に石巻南浜津波復興祈念公園と大川小学校では、「ここに住んでいたら、自分はどう行動していただろう」「生き延びることができたのだろうか」と震災を追体験するように想像していきました。大きな被害があったと知った今の自分なら真っ先に高い所に行けますが、そんな想像ができなかったであろうと考えると、公園になっている場所に住んでいた私は逃げなかったと思いますし、大川小学校の児童だった私は不安で思考が停止したまま誰かについていったと思います。自分ひとりの力で生き延びられる想像は１つもできませんでした。これから災害が起きたときのことを考えると、誰もがいのちを守れる確率の高い選択肢を選べるよう、みんなで準備をしておくことが本当に必要なのだと感じます。同時に、想像の中で逃げられなかった私としては、亡くなった方々をネガティブに語っていくのではない方法で、防災に繋げられたらいいなと思いました。

自然の力

写真 14 日和山から見た海

２泊３日の滞在を通して１番に感じたことは、自然の力です。地震も津波もそうですが、津波が去った後、人が身を寄せ合っている間にも雑草は生えていって、秋にはコスモスが咲いて、今では海の生態系も豊かに戻ってきていて…と、物凄いスピードで回復・創造していく自然の力は凄いなあ、と思いました。対して人の暮らしは、いろいろな要因が絡み合って、10 年経っても復興も創造も完全ではないのだろうと思います。それは人の力の小ささを感じる面でもあれば、今当たり前に過ごしている文明社会が、どれだけ昔から引き継がれ

て成り立っているのかという積み重ねの大きさを感じる面でもあります。数年で常識が変わってしまう世の中も、様々な人の努力と暮らしが連なって成り立っているのだと、初めて意識したように感じます。感謝の気持ちを持って、よりよく次の世代へ引き継いでいけるよう、できることから少しずつ、尽力していきたいと思います。